

2サムエル記7-9章 「ダビデ王国の確立」

1A ダビデ契約 7

1B ダビデ家への約束 1-17

1C 神の家への願い 1-3

2C 主の遠慮 4-7

3C 大いなる名 8-11

4C 世継ぎの子 12-17

2B 感謝の祈り 18-29

1C 僕への親切 18-21

2C イスラエルの民への真実 22-24

3C 約束に従った願い 25-29

2A 周辺への支配 8

1B 諸国の従属 1-14

1C 東西の国の屈服1-2

2C 北の連合と表敬 3-12

3C 南の屈服 13-14

2B 国内の正義 15-18

3A サウル家への恵み 9

1B 足の不自由な者 1-5

2B 僕の姿勢 6-8

3B 共なる食事 9-13

本文

サムエル記第二7章を開いてください。私たちは前回6章で、ダビデがエルサレムに神の箱を運んできたところを読みました。7章はその続きになります。

1A ダビデ契約 7

1B ダビデ家への約束 1-17

1C 神の家への願い 1-3

7:1 王が自分の家に住み、主が周囲の敵から守って、彼に安息を与えられたとき、7:2 王は預言者ナタンに言った。「ご覧ください。この私が杉材の家に住んでいるのに、神の箱は天幕の中にとどまっています。」7:3 すると、ナタンは王に言った。「さあ、あなたの心にあることをみな行ないなさい。主があなたとともにおられるのですから。」

私たちは前回、ダビデがエルサレムで王として即位して、その後にペリシテ人が襲ってきたところ

を読みました。けれども、そうした脅威がなくなりました。そしてツロの王から提供を受けた杉によって王宮も建てました。今、そこに安心して住んでいることができます。

けれどもダビデの霊的な情熱はそこで終わりませんでした。自分が杉材の家に住んでいるのに、神の箱が天幕にあるというのは、大変申し訳ない。主に対して、荘厳な家を建てたいという思いを告げました。ナタンは友人であり、また預言者です。そしてナタンは「あなたの心にあることをみな行ないなさい。主がともにおられます。」と言っています。これは、とても良い助言です。主が共におられるという真実があるならば、主が私たちの心や思い、また志の中に働いてくださって、私たちの道を導いてくださるからです。

2C 主の遠慮 4-7

けれども、主は優しく正してくださる時があります。私たちが情熱をもって主にお仕えしたいと思う時、そこに神の正しい知識が含まれていないことが時々あります。その時は主が介入してくださいます。

7:4 その夜のことである。次のような主のことばがナタンにあった。7:5 「行って、わたしのしもべダビデに言え。主はこう仰せられる。あなたはわたしのために、わたしの住む家を建てようとしているのか。7:6 わたしは、エジプトからイスラエル人を導き上った日以来、今日まで、家に住んだことはなく、天幕、すなわち幕屋にいて、歩んできた。7:7 わたしがイスラエル人のすべてと歩んできたどんな所で、わたしが、民イスラエルを牧せよと命じたイスラエル部族の一つにでも、『なぜ、あなたがたはわたしのために杉材の家を建てなかったのか。』と、一度でも、言ったことがあるか。

ダビデは、「主のために家を建てたい」と言っているのですが、主ご自身は、「あなたはそこまでなくてよいのだよ。」と基本的に仰っています。ここではダビデを責めているのではなく、そこまで主を礼拝したいというダビデの思いを高く評価してくださっているのです。

けれども、主はそのようにして仕えられる必要はない、と思われています。なぜなら、神と私たちとの関係は神が恵みをもって、神が先行して私たちに良くしてくださるのであり、私たちはそれに応答するだけだからです。私たちが神のために何かをするのではなく、神が私たちのために何かをしてくださり、私たちがその恵みに感動し、感謝して、神の前にひれ伏すのです。そして私たちは神に仕えます。そして主の命令に従います。

主はダビデに、「わたしは家に住んだことはなく、天幕にいて歩んできた。」と言われます。ここには、イスラエルと共に住まわれた主の姿があります。イスラエルが荒野の旅をしていたのだから、彼らが天幕に住んでいたのだから、主ご自身も同じところで天幕を張られていました。イエス・キリストはこのように私たちの間に住まわれる方です。「ことばは人となって、私たちの間に住まわれ

た。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。(ヨハネ 1:14)」

3C 大いなる名 8-11

7:8 今、わたしのしもべダビデにこう言え。万軍の主はこう仰せられる。わたしはあなたを、羊の群れを追う牧場からとり、わたしの民イスラエルの君主とした。7:9 そして、あなたがどこに行っても、あなたとともにおり、あなたの前であなたのすべての敵を断ち滅ぼした。わたしは地上の大いなる者の名に等しい大いなる名をあなたに与える。

主はダビデのことを、「わたしのしもべ」と呼ばれています。これは極めて名誉ある呼び名です。アブラハムに対しても使われました。モーセも、「主のしもべ」と呼ばれています。ヨシュアもそう呼ばれました。そして今、ダビデがそう呼ばれているのです。

そして、主はこれまでの恵みを思い起こさせています。すべて主語が「わたし」となっていることに注目してください。イスラエルの君主としたのは主ご自身であり、イスラエルの民は主ご自身の民です。そして戦いにおいては、主が彼とともにおり、敵を打ち滅ぼしてくださいました。

そして、これまでの恵みに加えて、あふれるようにさらに大いなる名を与えることを約束されています。「地上の大いなる名に等しい大いなる名」を与えるとされるのです。かつてアブラハムに対して、あなたを大いなる者とする約束されましたが、ダビデは同じように大いなる名が与えられました。新約聖書の始めは、「ダビデの子、アブラハムの子孫、イエス・キリストの系図」となっています。ダビデの名がアブラハムと並べて現れているのです。

7:10 わたしが、わたしの民イスラエルのために一つの場所を定め、民を住みつかせ、民がその所に住むなら、もはや民は恐れおののくことはない。不正な者たちも、初めのころのように重ねて民を苦しめることはない。7:11 それは、わたしが、わたしの民イスラエルの上にさばきつかさを任命したころのことである。わたしはあなたをすべての敵から守って、安息を与える。さらに主はあなたに告げる。『主はあなたのために一つの家を造る。』

イスラエルがエジプトから出てから、これまで基本的に彼らは安心して住むことはできませんでした。ヨシュアたちがカナンの地を占領して安息を得たのですが、イスラエルが不従順だったので、神は敵の手に任せるようにされました。それでイスラエルは苦役にあえいだので、神は憐れんで士師を遣わされたのです。その敵との戦いはサウルも継続し、そしてダビデの時にそれがほぼ完了したのです。それでイスラエルの民は一つの所に住みつき、恐れおののくことがなくなりました。

後の預言者たちの預言の中に、終わりの日に約束されているイスラエルの地の約束があります。そこでも同じく、イスラエルが敵から安心して住んでいる姿を描いています。「その国は剣の災害

から立ち直り、その民は多くの国々の民の中から集められ、久しく廃墟であったイスラエルの山々に住んでいる。その民は国々の民の中から連れ出され、彼らはみな安心して住んでいる。(エゼキエル 38:8)イスラエルは絶えず周囲の敵からの脅威に囲まれているのですが、主が再臨される時には再びこの安全が確立します。

そして、ダビデの時代に人々が一つの場所に安心して住むことができたので、主がとてつもない約束をダビデに与えられました。「主はあなたのために一つの家を造る。」です。ダビデが主のために家を造るのではなく、主がダビデのために家を造られます。「家」と言っても、これは建物のことではなく、王家のことです。ダビデ王朝を立てる、ということです。

4C 世継ぎの子 12-17

7:12 あなたの日数が満ち、あなたがあなたの先祖たちとともに眠るとき、わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子を、あなたのあとに起こし、彼の王国を確立させる。7:13 彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしはその王国の王座をとこしえまでも堅く立てる。

この約束は、ダビデの子ソロモンに対する者でもあり、またキリストを与えるという預言でもあります。大事なものは「子」であります。覚えていますか、神が与えられた初めてのメシヤ預言は、「女の子孫」でありました。そしてアブラハムに対して、「あなたの子孫」と主は言われましたが、それはアブラハムから出てくる数多くのイスラエル人のみならず、究極的にはキリストという一人の方を指していました。その「子孫」が、ダビデの世継ぎの子から生まれることを約束されました。

ダビデはこのことを何度も、詩篇の中で預言者として確認しています。自分の世継ぎの子ではありませんが、この方は主であり、そして自分の子だけではなく、神ご自身の御子であることを知っていたのです。詩篇第二篇にはこうあります。「わたしは主の定めについて語ろう。主はわたしに言われた。『あなたは、わたしの子。きょう、わたしがあなたを生んだ。わたしに求めよ。わたしは国々をあなたへのゆずりとして与え、地をその果て果てまで、あなたの所有として与える。(詩篇 2:7-8)」そして、後世の預言者も同じことを預言しました。ダビデの子なのですが、神ご自身の子であるということです。「ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。その主権は増し加わり、その平和は限りなく、ダビデの王座に着いて、その王国を治め、さばきと正義によってこれを堅く立て、これをささえる。今より、とこしえまで。万軍の主の熱心がこれを成し遂げる。(イザヤ 9:6-7)」そしてガブリエルが、マリヤが処女懐胎したときに、こう告げました。「その子はすぐれた者となり、いと高き方の子と呼ばれます。また、神である主は彼にその父ダビデの王位をお与えになります。彼はとこしえにヤコブの家を治め、その国は終わることがありません。(ルカ 1:32-33)」

そして大事なものは、これまでに啓示されていなかったことは、メシヤあるいはキリストが来られた

時は神の国を建てる、ということです。キリストがダビデの座に着かれ、イスラエルを、そして世界を治める国がこの地上に建てられます。これは、再臨の時を待たなければいけません。まだ実現していません。

7:14 わたしは彼にとって父となり、彼はわたしにとって子となる。もし彼が罪を犯すときは、わたしは人の杖、人の子のむちをもって彼を懲らしめる。7:15 しかし、わたしは、あなたの前からサウルを取り除いて、わたしの恵みをサウルから取り去ったが、わたしの恵みをそのように、彼から取り去ることはない。

いま話しましたように、ダビデの子は神ご自身の子となります。イエス様が、何回も神のことを「父」と呼ばれていたのはそのためです。そして、罪をこの子が犯す時のことを述べています。ダビデの子ソロモン、そしてその代々の王は、罪を犯してそれによって王国が分裂したり、周囲の敵からの攻撃を受けたりして懲らしめを受けました。けれども主ご自身は、罪は犯されなかったのに、全人類の身代わりになって人の子のむちをもって懲らしめを受けられました。

けれどもすばらしいのは、次の約束です。「わたしの恵みをそのように、彼から取り去ることはない。」という言葉です。16 節も読みましょう。

7:16 あなたの家とあなたの王国とは、わたしの前にとこしえまでも続き、あなたの王座はとこしえまでも堅く立つ。」7:17 ナタンはこれらすべてのことばと、これらすべての幻とを、そのままダビデに告げた。

ダビデに与えられた約束は、無条件のものでした。ダビデまたその後の子孫の不従順によって、破棄されるものではありませんでした。主は何度も、「とこしえまでも」と強調されています。これぞ、神の恵みの究極の現れです。

同じ約束をもって、主イエスは私たちと契約を交わしてくださいました。ご自身の血による新しい契約は、私たちの従順によるものではなく、もっぱら神がキリストにあって結んでくださった、神の真実によるものです。ですから、私たちに一時的な救いの保障を与えるのではなく、永遠の救いを与えることを可能にしているのです。「また、やぎと子牛との血によってではなく、ご自分の血によって、ただ一度、まことの聖所にはいり、永遠の贖いを成し遂げられたのです。(ヘブル 9:12)」二千年前に主が死なれました。そのただ一度の贖いによって、永遠の救いを定められました。

2B 感謝の祈り 18-29

1C 僕への親切 18-21

7:18 ダビデ王は行って主の前に座し、そして言った。「神、主よ。私がいったい何者であり、私の家が何であるからというので、あなたはここまで私を導いてくださったのですか。7:19 神、主よ。こ

の私はあなたの御目には取るに足りない者でしたのに、あなたは、このしもべの家にも、はるか先のことまで告げてくださいました。神、主よ。これが人の定めでしょうか。7:20 神、主よ。このダビデは、このうえ、あなたに何をつけ加えて申し上げることができましょう。あなたはこのしもべをよくご存じます。7:21 あなたは、ご自分の約束のために、あなたのみこころのままに、この大いなることのすべてを行ない、このしもべにそれを知らせてくださいました。

午前礼拝で学んだダビデの祈りです。繰り返されている言葉は、「神、主よ。」そして「この私」「このダビデ」「このしもべ」であります。神がこのようにつまらない自分に、これだけ大いなることをしてくださり、また知らせてくださった、という驚きです。ここに、ダビデの親密な主との関係の深まりがあります。彼は、主との関係において他の人が介入していないのです。圧倒的な恵みがこの自分に及んでいることを見えています。私たちは、自分に人を持ってくる、または自分を人前に出していくのではなく、主が良くしてくださっている恵みに感動すべきです。

2C イスラエルの民への真実 22-24

7:22 それゆえ、神、主よ。あなたは大いなる方です。私たちの耳にはいるすべてについて、あなたのような方はほかになく、あなたのほかに神はありません。7:23 また、地上のどの国民があなたの民のよう、イスラエルのようでしょう。神ご自身が来られて、この民を贖い、これをご自身の民とし、これにご自身の名を置かれました。あなたは、ご自身の国のために、あなたの民の前で、大いなる恐るべきことを行ない、この民をあなたのためにエジプトから、そして国々とその神々から贖ってくださいました。7:24 こうして、あなたの民イスラエルをとこしえまでもあなたの民として立てられました。主よ。あなたは彼らの神とされました。

ダビデは、イスラエルの民に対する神の大いなる真実と約束を述べています。天地創造の神が、この小さな群れであるイスラエルを選び、そしてご自分の国民としてくださいました。そして、大いなる業をイスラエルに与えてくださいました。

これはキリストにあつて私たち異邦人にも与えられている約束です。「しかし、あなたがたは、選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、神の所有とされた民です。それは、あなたがたを、やみの中から、ご自分の驚くべき光の中に招いてくださった方のすばらしいみわざを、あなたがたが宣べ伝えるためなのです。あなたがたは、以前は神の民ではなかったのに、今は神の民であり、以前はあわれみを受けない者であつたのに、今はあわれみを受けた者です。(1ペテロ 2:9-10)」

3C 約束に従った願い 25-29

7:25 どうか、神、主よ。あなたが、このしもべとその家について約束されたことを、とこしえまでも守り、あなたの約束どおりに行なってください。7:26 あなたの御名がとこしえまでもあがめられ、『万軍の主はイスラエルの神。』と言われますように。あなたのしもべダビデの家が御前に堅く立つことができますように。7:27 イスラエルの神、万軍の主よ。あなたは、このしもべの耳にはっきり、

『わたしが、あなたのために家を建てる。』と言われました。それゆえ、このしもべは、この祈りをあなたに祈る勇気を得たのです。7:28 今、神、主よ。あなたこそ神であられます。あなたのおこぼはまことです。あなたは、このしもべに、この良いことを約束してくださいました。7:29 今、どうぞあなたのしもべの家を祝福して、とこしえに御前に続くようにしてください。神、主よ。あなたが、約束されました。あなたの祝福によって、あなたのしもべの家はとこしえに祝福されるのです。」

ダビデは、大胆な祈りをしています。自分の家をとこしえに続くように、という祈りをしています。けれども、ここでは大きな根拠がありますね。主が約束をされた、という根拠です。そして主のことばによって、はっきりと「あなたのために家を建てる。」という言葉をいただいたからです。

私たちには、二つの間違っている祈りがあります。その一つは、疑いながら祈ることです。例えば、「どうか、この人をあなたの御心であれば救ってください。」と祈ります。そこには、「この人は救われるのか、救われないのか分からないから。」という疑いがあります。悪霊につかれて、火や水の中に入って暴れている自分の子について、父親がイエス様に、「もし、おできになるものなら、私たちをあわれんで、お助けください。(マルコ 9:22)」と頼みました。イエス様は、「できるものなら、と言うのですか。信じる者には、どんなことでもできるのです。」と言われました。そして父親は、「信じます。不信仰な私をお助けください。」と答えました。

聖書には、はっきりと約束が書かれています。「キリストは、罪人を救うために来られた。」という約束です。ならば、私たちはこのように祈らなければいけません。「主よ、どうか憐れんで、この人を救ってください。あなたが十字架の上で死なれたのは、この人のためでもあるのです。」ダビデと同じように約束を信じて、そして主に願い出るのです。

もう一つの誤った祈りは、自分で主を導くような祈りです。主に導かれなければいけないのに、やり方や考えを自分の主導で祈っていきます。「私はこうこう、こう思っています。主よ、だからそうしてください。」という祈りです。これは大胆な祈りではありません。主としもべとの関係を反対にした祈りです。英語を使うならば、私たちには direct な祈りが必要です。Direct とは、婉曲なしの、まっすぐ心から祈ることです。けれども、directing な祈りは必要ありません。Directing とは、自分が導く、指示するという意味です。人間関係でもそうですね、人にまっすぐに語るというのと、自己主張をして人を誘導するのとは大きな違いです。前者では、真実な人間関係が生まれますが、後者は自分が人を支配していきます。神に対しても同じです。

この二つの祈りは誤っていますが、ダビデの祈りは、「自分がこの願いを立てるには、あまりにもおこがましい。けれども、主がお語りになったのですから、その約束に従って祈ります。」というものでした。これが大胆な祈りであり、神が求めておられるものです。

2A 周辺への支配 8

8章では、周辺の国々を平定していくダビデの戦いを見ていきます。ここでは、ダビデがイスラエルの君主になっただけでなく、イスラエルが神の国民にふさわしく、諸国の民のかしらになっていく姿を見ていきます。モーセがイスラエルにこう約束しました。「主は、賛美と名声と栄光とを与えて、あなたを主が造られたすべての国々の上に高くあげる。そして、約束のとおり、あなたは、あなたの神、主の聖なる民となる。(申命記 26:19)」これまでイスラエルに敵対していた国々がイスラエルに従うようになります。

1B 諸国の従属 1-14

1C 東西の国の屈服1-2

8:1 その後、ダビデはペリシテ人を打って、これを屈服させた。ダビデはメテグ・ハアマをペリシテ人の手から奪った。

たった一節の言葉ですが、これは大きな出来事です。アブラハムの時代からペリシテ人はいました。その時から井戸のことで争いがありましたが、本格的にはヨシュアがカナン of 地に入ってからです。士師記において、ペリシテ人がいかにイスラエルを苦しめていたかはサムソンの話から知っています。そしてサムエルもペリシテ人との戦いであり、もちろんサウルとダビデはペリシテ人が最も大きな敵でありました。今ここで初めて、ペリシテ人が彼らに屈服しました。これから長いことペリシテ人は、イスラエルに従っていくようになります。

8:2 彼はモアブを打ったとき、彼らを地面に伏させて、なわで彼らを測った。なわ二本を伸ばして測った者を殺し、なわ一本を伸ばして測った者を生かしておいた。こうしてモアブはダビデのしもべとなり、みつぎものを納める者となった。

モアブですが、死海の東に位置する国です。ヨルダン川の東に宿営していたイスラエルの宿営をバラムによって呪おうとしたのがモアブ人の王です。士師記にもモアブの王がイスラエルを苦しめてくる場面が出てきます。けれどもダビデ自身はモアブ人の血が入っています。曾祖母がモアブ人ルツだからです。サウルの手から逃げている時に、モアブの王に両親を託しました。けれども、今ダビデは、モアブ人を厳しく処しています。ある人は、両親がひどい目にあつた、あるいは殺されたのでは、という人がいます。いずれにしても、イスラエルには依然として敵対していました。それで、二本の縄を伸ばして測る者、つまり身長の高い者は殺して、力のない者だけを生かしていました。そして、貢物を納めるようにさせています。これによって、ペリシテ同様、イスラエルに従属するようになります。

2C 北の連合と表敬 3-12

8:3 ダビデは、ツォバの王レホブの子ハダデエゼルが、ユーフラテス川流域にその勢力を回復しようとして来たとき、彼を打った。8:4 ダビデは、彼から騎兵千七百、歩兵二万を取った。ダビデは、

その戦車全部の馬の足の筋を切った。ただし、戦車の馬百頭を残した。

ユーフラテス川流域に勢力を回復しようとした王を、ダビデは打つことができました。これは、次のアブラハムに対する神の約束を思い出します。「わたしはあなたの子孫に、この地を与える。エジプトの川から、あの大川、ユーフラテス川まで。(創世記 15:18)」この約束はダビデの時代には実現しませんでした。ユーフラテス川まで土地の所有はしていないからです。けれども、勢力圏を確保しました。一步、神の約束に近づいたものとなったのです。

そして興味深いことは、ダビデは騎兵千七百を取ったにも関わらず、そのほとんどの馬の足の筋を切ったことです。これはどういうことなのか？モーセがイスラエルの王についての戒めを与えたことがありました。「王は、自分のために決して馬を多くふやしてはならない。馬をふやすためだといって民をエジプトに帰らせてはならない。「二度とこの道を帰ってはならない。」と主はあなたがたに言われた。(申命記 17:16)」イスラエルは、人の武力に頼って強くなるものではありません。馬は、当時は、まさに国の武力の象徴でした。それを絶ち切ることによって、主に国の安全保障を委ねたのです。「ある者はいくさ車を誇り、ある者は馬を誇る。しかし、私たちは私たちの神、主の御名を誇ろう。(詩篇 20:7)」

8:5 ダマスコのアラムがツォバの王ハダデエゼルを助けに来たが、ダビデはアラムの二万二千人を打った。8:6 ダビデはダマスコのアラムに守備隊を置いた。アラムはダビデのしもべとなり、みづきものを納める者となった。こうして主は、ダビデの行く先々で、彼に勝利を与えられた。

ツォバはアラムと同盟を結んでいました。アラムはシリアのことです。それで援軍を送りました。けれどもアラムをも打ち破り、アラムの首都ダマスコに守備隊を置くことができました。守備隊を置けば、そこから税を徴収できるし、また監視もすることができます。こうして、イスラエルの国は南西はペリシテ、南東はモアブ、それから北西はアラムと、次々と周囲を平定していったのです。

そして大事な言葉を読みすごしてはいけません。「主は、ダビデの行く先々で、彼に勝利を与えられた。」とあります。私たちにもこの約束があります。「しかし、私たちは、私たちが愛してくださった方によって、これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです。(ローマ 8:37)」またヨハネは第一の手紙でこう言いました。「なぜなら、神によって生まれた者はみな、世に勝つからです。私たちの信仰、これこそ、世に打ち勝った勝利です。世に勝つ者とはだれでしょう。イエスを神の御子と信じる者ではありませんか。(1ヨハネ 5:4-5)」

8:7 ダビデはハダデエゼルの家来たちの持っていた金の丸い小盾を奪い取り、エルサレムに持ち帰った。8:8 ダビデ王は、ハダデエゼルの町ベタフとペロタイから、非常に多くの青銅を奪い取った。

これらの分捕り物は、後で主にお捧げするものとなります。歴代誌に書かれていますが、ダビデはソロモンの神殿建設のために、金銀、青銅、鉄を用意しました(1歴代誌 22:14)。

8:9 ハマテの王トイは、ダビデがハダデエゼルの全軍勢を打ち破ったことを聞いた。8:10 そこでトイは、その子ヨラムをダビデ王のもとにやって、安否を尋ねさせ、ダビデがハダデエゼルと戦ってこれを打ち破ったことについて、祝福のことばを述べさせた。ハダデエゼルがトイに戦いをいどんでいたからである。ヨラムは銀の器、金の器、青銅の器を手にして来た。8:11 ダビデ王は、それをもまた、彼の征服したすべての国々から取って聖別する銀や金とともに主に聖別してささげた。

ツォパの少し南にあるのがハマテです。ハマテの王は、友好的形でダビデのところに来ました。けれどもやはり、他に敵対している国と同じように多くの金銀、青銅の器を持って来ました。興味深いのは、敵対するにしても、友好的形でも、貢物をダビデに持ってきたことです。これは、キリストと全ての人との関係でも同じことが言えます。王なるキリストに対して、この方にひれ伏して、喜びをもって主に捧げることもできますし、反抗して神から裁かれる時に「イエスは主である」と告白することもできます。どちらにしても、キリストにひれ伏すのです。前者は救いを得るための服従ですが、後者は永遠の罰を受けるための服従です。

そして、分捕り物のすべてを主に聖別した、というのはすばらしいことです。ダビデは、自分を富ませるためにこれらの分捕り物を取ったのではありません。主が彼をイスラエルの君主にしたのだから、主にお捧げするものとしてこれらの分捕り物を捧げました。ダビデは徹底していました、「私は礼拝者であり、私には何もない。しかし主が私にとって全てだ。」という立場です。

8:12 それらは、アラム、モアブ、アモン人、ペリシテ人、アマレクから取った物、およびツォパの王レホブの子ハダデエゼルからの分捕り物であった。

アラム、モアブ、ペリシテの他に、アモン人とアマレクがいます。アモン人は 10 章に出てきますが、来週見ていきます。

3C 南の屈服 13-14

8:13 ダビデが塩の谷でエドム人一万八千を打ち殺して帰って来たとき、彼は名をあげた。8:14 彼はエドムに守備隊を、すなわち、エドム全土に守備隊を置いた。こうして、エドムの全部がダビデのしもべとなった。このように主は、ダビデの行く先々で、彼に勝利を与えられた。

エドムもイスラエルの敵であり続けました。モアブの南、死海の南にあるのがエドムです。「塩の谷」とありますが、死海の南のところは、塩の岩が続いています。そこで一万八千人を打ち殺しました。そして、ダマスコと同じように守備隊を置き、彼らを監視下に置きました。

2B 国内の正義 15-18

8:15 ダビデはイスラエルの全部を治め、その民のすべての者に正しいさばきを行なった。8:16 ツェルヤの子ヨアブは軍団長、アヒルデの子ヨシャパテは参議、8:17 アヒトブの子ツアドクとエブヤタルの子アヒメレクは祭司、セラヤは書記、8:18 エホヤダの子ベナヤはケレテ人とペレテ人の上に立つ者、ダビデの子らは祭司であった。

イスラエル国内に戻ります。大事な言葉がここにあります。「その民のすべての者に正しいさばきを行なった。」であります。英語でいうならば、justice で日本語では「公義」とも「公正」とも訳すことのできる言葉です。ここには、民に対してえこひいきすることなく、公正に接していったという意味合いもあります。

ダビデは自分の生涯の終わりに歌をうたいましたが、その中にこうあります。「義をもって人を治める者、神を恐れて治める者・・(23:3)」義をもって人を治めるのは、神を恐れて治めるのだ、ということです。私たちは自分のありのままの姿であれば、えきひいきして生きています。自分の気の合う者たちだけを集めて、自分の気持ちや思いに同意してくれる人だけと付き合い、そうではない人たちには接しない、ということをしします。けれども、そうした差別する思いを持ちながら人をまとめ、治める立場に着いたのであれば、とんでもないことになります。私たちが自分の差別的の思い、えこひいきの思いから守られるのは、唯一、神を恐れることです。公正な神に自分を委ねることです。

そして、ダビデの側近らの名前が書かれています。ヨアブが軍団長であることは、私たちは知っていますね。興味深いことに、祭司は二人います。ツアドクとエブヤタルの子アヒメレクです。アロンの家系の中にこの二つの枝があります。エブヤタルは祭司エリの家系の中にいます。彼はダビデの死後、罷免となります。ツアドクの家系が祭司職として残ります。

ベレヤがいますが、ケレテ人とペレテ人という異邦人ですが、イスラエルに亡命してきた勇士たちの長になりました。そして最後に「ダビデの子らは祭司」とありますが、歴代誌第一では「側近」と訳されています(18:17)。祭司はアロンの子孫でなければいけないので、側近の訳が正しいでしょう。

3A サウル家への恵み 9

そしてダビデの生涯において、とても大事な時が訪れます。それは、サウルの家との関係です。

1B 足の不自由な者 1-5

9:1 ダビデが言った。「サウルの家のもので、まだ生き残っている者はいないか。私はヨナタンのために、その者に恵みを施したい。」

ダビデは、サウルに誓い、またヨナタンと契約を結んでいました。サウルが王であったとき、それ

でも神がダビデを選び、ダビデが王になることを知っていたヨナタンは、このようにダビデに願っていたのです。「あなたの恵みをとこしえに私の家から断たないでください。主がダビデの敵を地の面からひとり残らず断ち滅ぼすときも。(1サムエル 20:15)」サウル家からダビデ家に王権が移りました。人間的に考えればサウル家は、ダビデにとっては最も大きな不安定要因です。サウル家の者たちをことごとく滅ぼすのが、当時の人間常識からすると賢いことでした。けれどもヨナタンは、ダビデに恵みを施してほしいと願っていたのです。この「恵み」というのは、ヘセド、つまり「真実の愛」と訳すことのできる言葉です。

ダビデは生涯に渡って、サウル家に対して悪い扱いをしませんでした。そして完全にイスラエルが自分の支配下に入った時に、それでもダビデはこの恵みをサウル家の子孫に分け与えたかったのです。これは、ダビデ自身が主から大いなる恵みを受けていたからです。自分取るに足りない者なのに、大いなる名を神が与えてくださいました。この恵みを思うときに、私たちは祝福を受けてはいけない人に祝福を分かち合うことができるのです。

9:2 サウルの家にはツィバという名のしもべがいた。彼がダビデのところに召し出されたとき、王は彼に尋ねた。「あなたがツィバか。」すると彼は答えた。「はい、このしもべです。」9:3 王は言った。「サウルの家のもので、まだ、だれかいないのか。私はその者に神の恵みを施したい。」ツィバは王に言った。「まだ、ヨナタンの子で足の不自由な方がおられます。」9:4 王は彼に言った。「彼は、どこにいるのか。」ツィバは王に言った。「今、ロ・デバルのアミエルの子マキルの家におられます。」9:5 そこでダビデ王は人をやり、ロ・デバルのアミエルの子マキルの家から彼を連れて来させた。

ダビデは、サウル家についてどうなっているのか知りませんでした。けれども、サウル家で仕えていたツィバという人物は見つけることができました。それで尋ねてみると、ロ・デバルにマキルという人に家で住んでいました。ロ・デバルは、ゴラン高原のほうにある町です。そこに隠れるようにしてヨナタンの子が生きていたのです。そして思い出していただけるでしょうか、彼は足が不自由です。彼が幼い時に乳母が、サウルとヨナタンがペリシテ人の手によって殺されたことを聞いて、逃げていた時に彼を落としてしまったからです。

2B 僕の姿勢 6-8

9:6 サウルの子ヨナタンの子メフィボシェテは、ダビデのところに来て、ひれ伏して礼をした。ダビデは言った。「メフィボシェテか。」彼は答えた。「はい、このしもべです。」9:7 ダビデは言った。「恐れることはない。私は、あなたの父ヨナタンのために、あなたに恵みを施したい。あなたの祖父サウルの地所を全部あなたに返そう。あなたはいつも私の食卓で食事をしてよい。」9:8 彼は礼をして言った。「このしもべが何者だというので、あなたは、この死んだ犬のような私を顧みてくださるのですか。」

メフィボシェテに対して、「恐れることはない。」とダビデは言っています。当然彼は恐れていまし

た。彼はその場で殺されてもおかしくない立場でした。けれども、ダビデは恵みを施します。サウル家の地所を彼に返します。そして、王と同じ食卓で食事をします。王と食事をするというのは、王の支配下にいることを表すと同時に、王に完全に受け入れられていることを表すものでした。したがって、メフィボシエテは王ダビデに従うということ以外、すべてのものが回復されたということになります。

そこで彼は、「このしもべが何者だということで、顧みてくださるのですか。」と言っています。そして自分を強い蔑称を使って表現しています。「この死んだ犬のような」と言っています。思い出してください、ダビデが先ほど神から約束を告げられて、ダビデが神に対して語った言葉が、「このしもべが何者だということで」という言葉でした。ダビデは、自分が受けた神の恵みを彼にも分かち合ったのです。

このメフィボシエテの姿は、まさにラオデキヤの教会に対してイエス様が約束されたことに通じます。「見よ。わたしは、戸の外に立ってたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところにはいって、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。(黙示 3:20)」有名な御言葉ですが、神の恵みによって王なるイエスと食事をすることが許される、という恵みについて話しているのです。その証拠に、次の節はこうなっています。「勝利を得る者を、わたしとともにわたしの座に着かせよう。それは、わたしが勝利を得て、わたしの父とともに父の御座に着いたのと同じである。(21 節)」イエスが父の御座に着いていたように、彼にもイエスの座を着かせるのです。メフィボシエテに、サウル家の地所が取り戻されました。したがって、本当は死んだ犬、つまり罪の中で死んで、踏みつけられるような者だったのに、王の待遇を与えられたという恵みを表しています。

3B 共なる食事 9-13

9:9 そこで王はサウルの若い者であったツィバを呼び寄せて言った。「サウルと、その一家の所有になっていた物をみな、私はあなたの主人の子に与えた。9:10 あなたも、あなたの息子たちも、あなたのしもべたちも、彼のために地を耕して、作物を得たなら、それはあなたの主人の子のパン、また食物となる。あなたの主人の子メフィボシエテは、私の食卓で、いつも食事をすることになる。」ツィバには十五人の息子と二十人のしもべがあった。9:11 ツィバは王に言った。「王さま。あなたが、このしもべに申しつけられたとおりに、このしもべはいたします。」こうして、メフィボシエテは王の息子たちのひとりのように、王の食卓で食事をすることになった。9:12 メフィボシエテにはミカという名の小さな子どもがいた。ツィバの家に住む者はみな、メフィボシエテのしもべとなった。9:13 メフィボシエテはエルサレムに住み、いつも王の食卓で食事をした。彼は両足が共になえていた。

サウル家の地所はベニヤミン領にありますが、メフィボシエテはエルサレムに留まっています。彼は王と食事をしますが、その地所においては、メフィボシエテの子ミカのための食べ物育てる畑となります。ツィバはそこで働きます。そして、メフィボシエテのしもべとなります。ずっと後で、

この立場を疎んでいたことが明らかになります。メフィボシェテのことをダビデに中傷します。

私たちが今年の終わりに、こうしてダビデが受けた恵みを見ることができたのは幸いだと思います。午前礼拝では、主が行なってくださった驚くべきことに目を留めることをお勧めしましたが、今はその恵みを来年、どのように人々に分かち合っていくのか、そのことも考え、祈りながら時間を過ごせれば良いのではないかと思います。私たちは、王の子どもです。神の王子キリストに連なる者たちです。メフィボシェテのように、キリストにあって相続を得ている者です。このような大きな恵みを受けたのですから、それにふさわしく歩んでいきたいと思えます。